

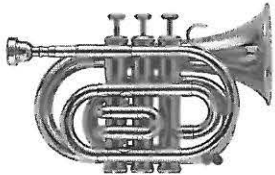


Title	CBR(Community Based Rehabilitation)からみた地域の取り組み：ベトナム ベンチェ省の経験に学ぶ
Author(s)	坂東, あけみ
Citation	目で見えるWHO. 2012, 50, p. 26-26
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86740
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



CBR (Community Based Rehabilitation) から みた地域の取り組み

～ベトナム ベンチェ省の経験に学ぶ～

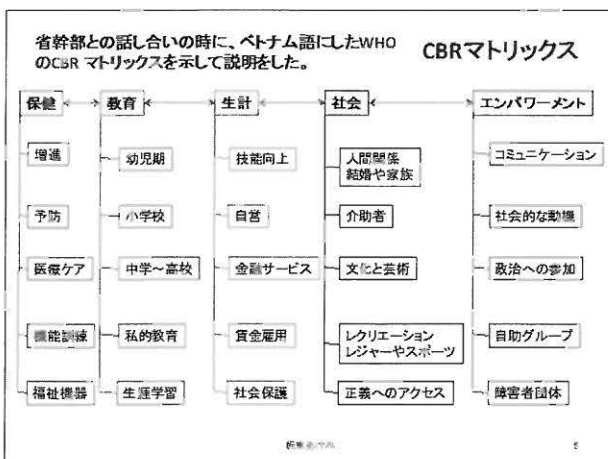
ベトナムの子ども達を支援する会 事務局長 坂 東 あけみ



Akemi BANDO

1974年 京都教育大学特殊教育学科卒業
2005年 大阪大学大学院博士前期課程卒業
2009年 大阪大学大学院博士後期課程
単位満期習得退学
NPO HANDS テクニカルアドバイザー
ベトナムの子ども達を支援する会 事務局長
国際母子健康手帳委員会 渉外担当
<http://www.mchbook.org/>

日本人として途上国にかかわる場合、CBR (Community Based Rehabilitation: 地域に根ざしたリハビリ) というのは、理解しにくい。日本ではすでに医療機関が発達し、多くの専門家が活動しているので、在宅医療といえども、HBR (Hospital Based Rehabilitation) の一環である。つまり自分たちが日本で経験していない領域がCBRである。CBRというのは下記の表に示すように、総合的な考え方である。



人間の「生活や人生」と言うことを考えるときに、それは複合的な行政サービスや地域の人々のかかわりを抜きには考えられない。その考え方がCBRの大きな骨格となる。

では、実際に途上国の現場でCBRはどのように実施されているかということになると、国の政策や社会構造、宗教的・文化的背景などにより違いが出てくる。私たち

は1990年からベトナム南部メコンデルタ地帯にあるベンチェ省で活動しているが、今回はそのベンチェ省でのCBRの経過をたどり、現状と今後の課題を考える。

ベンチェ省では1999年頃より本格的にCBRが動き始めたが、もともとは1989年のベンチェ省独自の障がい者実態調査から始まる。そこで省内の約3分の1の地域が調査され、その余りの厳しさに省の幹部が動き出した。実際に、どこかの国際機関が入り、いくつかの村で試行事業を行うのは比較的簡単であるが、それをその地方行政のシステムや、ひいては国家政策に上げたりして行くのは、非常に強力な戦略と強い信念が必要である。パイロットがパイロットで終わってしまう事業も多い中で、ベンチェ省の場合、幸運にも歴代の強い信念を持った行政指導者に恵まれ、当初から省全域の取り組みとして障がい者対策がおこなわれた。当初は現地資金の不足とも相まって本格的なCBRと言うものではなく、医療中心の「資金が来たら行く」的な部分もあった。しかし、2005年にベンチェ省全域でCBRネットワークを張り巡らせた頃から、本格的省全域レベルのCBRとしてスタートした。

2012年8月、「ベトナムの子ども達を支援する会 SVCR」はCBRに協力するツアーを実施した。その活動を通して、CBRの重要な課題を内包する現状が明らかになってきた。「障がいのある人たちの権利を守る」という視点で見れば、CBR未経験の日本人でも一緒に考える基盤が、そこにあった。

